

三川内焼

歴史探訪

【特集】

日本史の大きな流れの中で四百年の歴史の幕を開けた三川内焼。一つ一つ職人の手の動きだけで生み出される白磁の逸品は、かつて將軍家だけでなく、ヨーロッパの王侯貴族をも魅了しました。その卓越した技術は陶工たちの努力によって代々受け継がれ、今の作品の中にもしっかりと息づいています。そして、手仕事そのものの価値が見直されている現代、手仕事の技術の粋を極めたと称される三川内焼は、その輝きをさらに増しています。今回の特集では、日本遺産にも認定され再注目されている三川内焼の歴史の始まりや藩窯・民窯の移り変わりなどを紹介し、四百年の歴史を振り返ります。

窯跡からたどる歴史

江戸時代、三川内地区には、三川内皿山、江永皿山、木原皿山の三地区の窯場がありました。この三地区では約四百年の間、焼き物を作り続けていたため、現在も古い窯跡が各地に残っています。

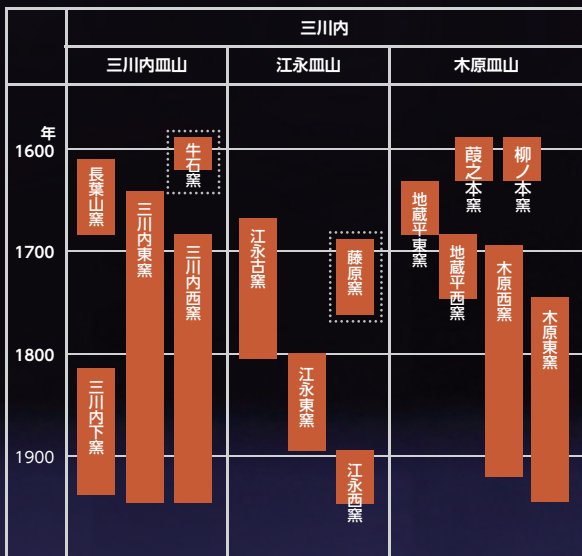
まず、1500年代の末頃に木原町の霞之本窯、柳ノ本窯、そして、新替町の牛石窯が三川内で最初に開かれました。これらの窯は器を焼くドーム状の部屋がいくつもつながって斜面を登っていたため「連房式登窯」と呼ばれていました。初期の窯室は縦横約2m、全長約35mの規模で、1630年代まで続きました。

次に開かれたのは、木原町の地蔵平窯や三川内町の長葉山窯でした。この二つの窯は1620〜30年頃に始まり、前半は陶器を焼いていましたが、後半には磁器を焼いているため、陶器から磁器に移り変わる時代の窯といわれています。窯の部屋は縦横約3m、全長は約40m程度でした。

江永皿山には、三川内や木原皿山より遅れ、1600年代の後半に窯が開かれました。江永古窯です。この窯では当初、輸出品の磁器を焼きましたが、その後国内向けの刷毛目陶器を焼き、1700年代後半はさらに低価格の粗製磁器を焼きました。それらは関西方面で大量に消費されました。



三川内諸窯の移り変わり



1700年代に入ると、三皿山は大窯の寄り合い(共同)窯にまとまります。木原皿山は木原西窯と東窯、江永皿山は先の江永古窯、三川内皿山は三川内東窯と西窯です。最大時の三川内東窯の窯室は縦約5m、横約7mで、10数室が連なり全長約120mにもなりました。この窯は同じ場所でも何回も造り直し、明治から大正、昭和まで焼き続けました。



連房式登窯の模型 (うつわ歴史館)

「岸岳崩れ」「高麗婁・巨関」から始まる歴史

歴史の始まり「岸岳崩れ」

三川内焼の歴史は豊臣秀吉などによる日本史の大きな流れの中で始まりました。秀吉は天下を統一した後、今度は明国（今の中国）を征服しようとして朝鮮半島に攻め入り（文禄の役1592年、慶長の役1597年）、全国から多くの大名が動員されました。

このような中、文禄の役で動員された唐津の波多三河守は朝鮮での戦いぶりが悪く、秀吉の怒りを買い、取り潰されることになりました。

波多氏は岸岳（現唐津市相知町）に城を持ち、岸岳の麓に窯を築いて陶工を保護していましたが、保護者である波多氏がなくなつたため、陶工たちは肥前各地に離散してしまいました。世に言う「岸岳崩れ（1593年）」です。

離散した陶工は有田や波佐見などで陶器を焼き始め、佐世保でも、靉之本窯（木原町、県指定史跡）や柳ノ本窯（木原町）、牛石窯（新替町）が開かれたと考えられています。これらの窯場が三川内焼の始まりとされており、主に唐津系の陶器が焼かれました。30年ほど続いたようですが、その後、別の場所に窯き直されました。

二人の陶祖



(左) 天満宮鳥居 (右) 陶祖神社鳥居

三川内焼の発展に功績があったとして、高麗婁は陶祖として天満宮境内にある釜山神社に祀られており、藩窯の二代目棟梁・今村弥次兵衛（如猿）も同じく陶祖として陶祖神社の祭神になっています。

高麗婁は糞灰を使って陶器を作るなど、それまで三川内になかった斬新な方法で焼き物づくりを行ったといわれています。また、最初の藩窯にも参加しています。このような功績から陶祖になったと考えられています。

ではなぜ、初代棟梁であった今村三之丞は陶祖にならず、二代目の弥次兵衛（如猿）が陶祖になったのでしょうか。

三之丞が最初に藩窯とした長葉山窯の時代は主に輸出品や日用雑器が焼かれていたとされており、一方、弥次兵衛が住んでいた屋敷跡（伝・代官所跡）からは、発掘調査により、三つ葉葵紋の献上品など初期の御用窯作品であると想定される磁器が出土しました。

このようなことから、三川内焼の歴史では、三之丞が磁器技法の基礎をつくり、それを弥次兵衛の代になって確立させたということが通説になっており、純白の磁器作りに成功した功績をたたえて、平戸藩が弥次兵衛（如猿）を陶祖として崇めるように指示を出したのではないかと考えられています。

もう一つの焼き物の流れ

三川内焼のもう一つの流れも日本史などの大きな流れに起因するものでした。

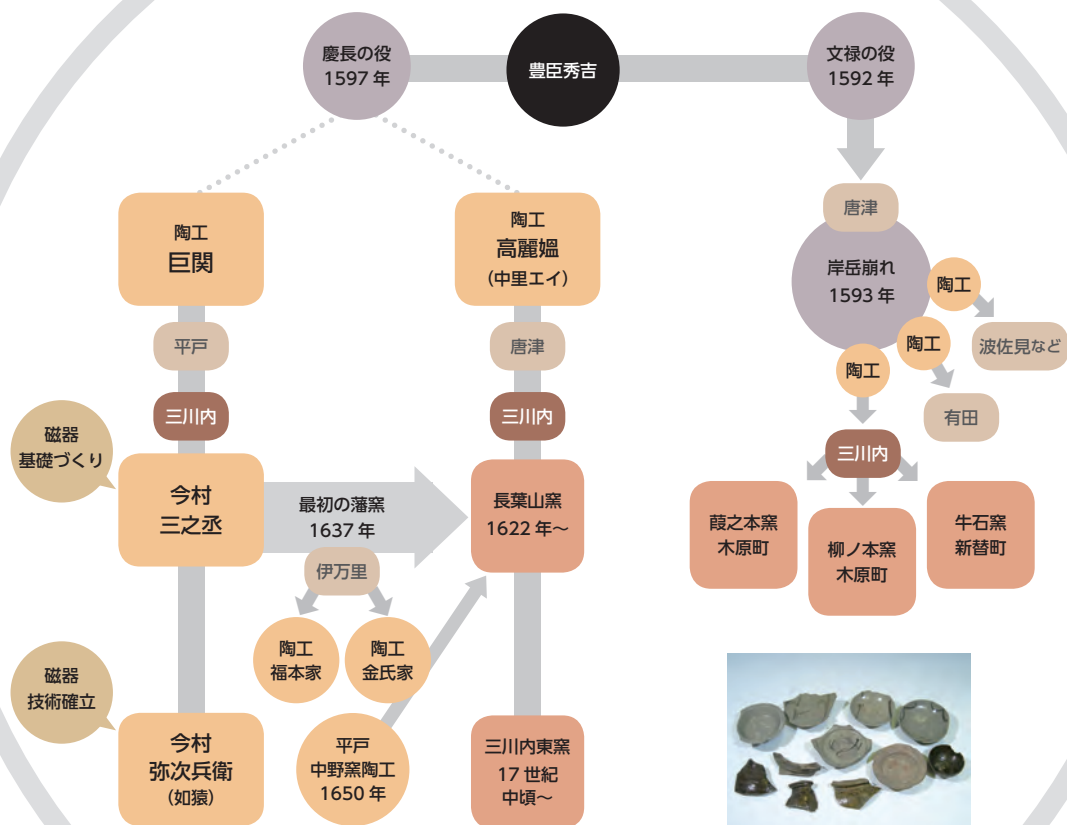
朝鮮に攻め込んだ日本軍は李氏朝鮮軍や明国軍などの激しい抵抗によって苦戦を強いられ、ついに秀吉の死によって引き揚げることになりました。出兵した大名たちは朝鮮から引き揚げる時、陶工など多くの技術者を連れて帰りました。当時は干利休などの影響で茶の湯（茶道）が流行し、高麗茶碗等が珍重されていたため、各藩はそのような茶器や陶器の生産ができる技術者が必要とされたのではないかと考えられています。このことにより九州各地にたくさん窯場が誕生しました。

これらの陶工のうち三川内焼の発展に大きな影響を及ぼしたのは高麗婁と巨関の二人の陶工でした。

高麗婁は来日後、唐津藩（現伊万里市）の椎ノ峰の中里茂右衛門と結婚して焼き物を作っていました。夫の死を契機に、朝鮮出身の陶工を頼って三川内へ移住し、長葉山で窯を開いたといわれています。

一方、巨関は当初、平戸の中野窯で焼き物を作っていました。しかし良い陶石に恵まれなかったため、息子の今村三之丞とともに平戸領内の陶石探索の旅

三川内焼の歴史が始まる大きな流れ



靉之本窯跡出土品

に出たと伝えられています。

その後、三之丞は磁器づくりの研究が平戸藩主に認められ、藩の命により藩窯の初代棟梁になりました。陶器から磁器への転換時期に大変尽力し、磁器技術の基礎をつくったといわれています。三之丞の子、今村弥次兵衛は磁器技術を確立したといわれています。優れた技術によって幕府への献上品や薄手の高級品などを数多く作りしました。

陶祖たちの子孫



三川内地区には、陶祖の高麗婁や今村弥次兵衛の子孫の人たちが今も住んでいます。三川内山だけでも中里家、今村家、御用窯を開く時、三之丞が椎ノ峰から招いた福本弥次右衛門を先祖とする福本家、窯焼方の金氏太左衛門を先祖とする金氏家、このほか藤本家や里見家など、多くの人たちが住んでおり、今も伝統を受け継いで三川内焼の生産や販売に従事しています。

藩窯の始まりと輸出・大量生産に沸いた時代

三川内に平戸藩の藩窯

文禄・慶長の役後、佐賀藩祖の鍋島直茂は平戸藩と同じように朝鮮陶工を地元連れ帰りました。その中の一人、李参平は1616年に有田に移り住み、陶工たちのリーダーとして奮闘し、芽生えたつあった日本磁器の生産が一気に開花しました。磁器は陶器より白く光沢があり強度も優れていたため食器として大変人気を博しました。当時、磁器は革新的な製品で、三川内をはじめ全国の他の地域でも生産が望まれましたが、生産技法は秘匿され、有田の泉山陶石のような豊富な良質原料も不可欠なため、容易に開発できるものではありませんでした。

一方、巨関・三之丞親子は陶石探索のため平戸を後にし、三川内で窯を開いたといわれていますが、そこでも満足できる焼き物ができず、三之丞は唐津藩の椎ノ峰や大村藩（波佐見）三股などの窯場で長年修行や研究に励んだと伝えられています。

そのような折、三之丞はそれまでの功績が認められ、1637年、平戸藩主から三川内に藩窯を開くことを命じられたといわれています。三之丞は椎ノ峰で面識のあった福本弥次右衛門や山内長兵衛、豊突などを招き、絵師に山内長兵衛豊英、前田徳左衛門、窯焼き方に中里茂右衛門、福本弥次右衛門、口石長右衛門、金氏太

左衛門、藤本治左衛門を配して藩窯の体制を整え、最初の藩窯を高麗燗の長葉山窯に置き、その一部を使用したと考えられています。

平戸藩主は1641年に三之丞を初代皿山棟梁兼代官に任命し、1643年には、燃料や製品の管理体制を整備するため、三川内に皿山役所を設置し、木原と江永には出張所を設置したといわれています。以降、三川内における「皿山」とはこの三地区を指し、三つの窯場は「三皿山」と呼ばれるようになりました。

1650年には平戸中野の陶工のほとんどを三川内に移住させ、藩窯の体制をさらに充実させました。

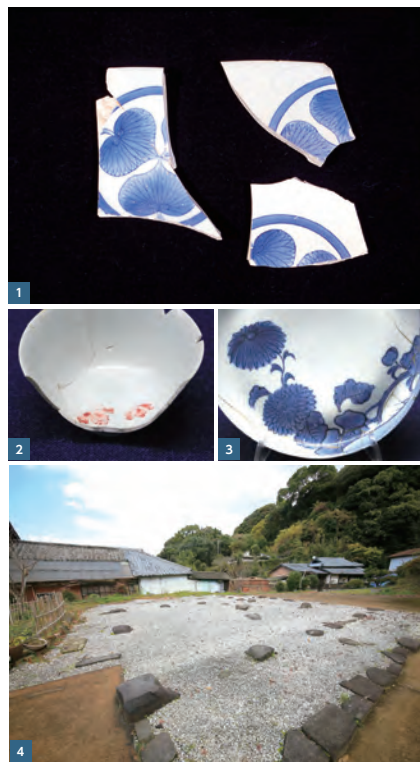
初めての幕府献上と弥次兵衛

1657年、江戸幕府は江戸一帯が火災に見舞われた「明暦の大火」で江戸城本丸などを消失したため、その再建に当たり全国の主要な大名に御道具の献上を命じました。

これを受け、平戸藩の命により、幕府への最初の献上品の製作に取り組んだのが今村三之丞とその子、弥次兵衛であったといわれています。弥次兵衛の努力の結果、1659年、平戸藩は全国で唯一、磁器の皿三百枚と鉢十枚を献上したことが徳川家の古文書に残されています。

弥次兵衛は、天草陶石と針尾三ツ岳の網代陶石の調合に成功し純白の白磁を完成させたと考えられており、さらに青藍染付や盛上細工物などの優れた作品を次々と生み出し、三川内焼を平戸藩の藩

伝・代官所跡の出土品



1 徳川家へ献上するために作られたと考えられる三つ葉葵紋が描かれた大皿の一部 2 色絵花鳥文皿の一部。この時期に赤絵の技術を持っていたことは驚きの発見でした 3 染付が美しい菊花文皿 4 現在の伝・代官所跡

藩窯

藩窯とは藩が経営する窯。藩窯の細工人たちは名字を許され、公課・諸役を免除され、一定の扶持米（給与として藩から与えられる米）が与えられた上、原料の陶石や薪材も与えられました。そのため細工人たちはただひたすらに優れた焼き物を作ることに没頭でき、高度な技術を用いて幕府への献上品などを作ることができました。また、その技術は秘密保護のため「一子相伝」（自分の子1人だけに技術を伝える）の制度が設けられました。藩窯は窯の全部を使うだけでなく、火まわりの良い1、2室を御用窯として使い、他の部屋では各職人（民窯）が日用雑器などを主体に焼いていました。

献上品と伝・代官所跡の発掘

三川内皿山にある「伝・代官所跡」（御用窯の棟梁・今村家の屋敷跡）の発掘調査（2000～2001年）では、数多くの染付や色絵磁器が出土しました。これらは有田の長吉谷窯跡や柿右衛門跡などで1660年前後に作られた薄手なものと技術的に同水準で、当時としては高い技術を要して作られたものでした。この出土された磁器群の一部は1659年に將軍家に献上された三川内焼と同年代に製作されたものと考えられており、將軍家献上の磁器がどのようなものだったかを検証する貴重な資料となっています。

窯として大成させたといわれています。平戸藩主はそのような数々の功績をたたえ、弥次兵衛に「如操」という号を授けたとされています。

民窯 輸出と大量生産の時代

17世紀中頃から、民窯では一時期海外への輸出品製造に沸きました。この時期は、中国が明から清へ政権が移る混乱期で、中国製陶磁器の輸出が止まり、世界への供給量が激減していました。そこで東南アジアやヨーロッパ向けの陶磁器貿易品を扱っていた中国商人やオランダ東インド会社は肥前地域にその補充を求めようになり、肥前地域で輸出向け陶磁器の大量生産が始まりました。

輸出品の中で多く生産されたのは「雲龍文碗」という大きめの碗や「白の宇鳳凰文皿」などでした。低廉な焼物で、主に東南アジア向けの普及品でしたが、有田の他、三川内や波佐見なども生産され、長崎出島から輸出されました。

この輸出景気も中国からの輸出が再開されたため、次第に需要が頭打ちになりました。三川内の諸窯では国内向けの生産に転換せざるを得なくなり、雲龍文碗に代わる商品として「時期」緑釉皿を生産し、間もなく「刷毛目」に転換し、碗や皿を焼き始めました。

18世紀前半になると波佐見と連動するようになり「陶胎染付」（通称「くらわんか茶碗」）の大量生産に入っていました。原材料のコストを抑えた廉価品で、波佐見と三川内などで大量に製造され、主に関

雲龍文碗



1660年頃から焼かれ始めた雲龍文碗。龍や鯉などが描かれた

(上) 1690年頃から焼かれ始めた刷毛目の碗。鉄分の多い土を下地にし白土を化粧掛けしたもの。多くは白化粧の際に口クロで回しながら刷毛が入り込まれた (中) 三川内や唐津、伊万里で焼かれた刷毛目は特に明治期から木原皿山の「木原刷毛目」として注目され「日本陶磁史論」（1903年）でも紹介されている (下) 木原刷毛目の技術を用いて現川焼の再現に成功した臥牛窯。写真は代表的な絵柄の白鷺が描かれた皿

刷毛目文碗



陶胎染付碗



陶器の生地に白磁土を施釉のように化粧掛けて唐草文や山水文が染付けられました

西方面で売買されました。船で大阪・京都間を行き交う旅行者に対し飲食業者が「くらわんか」と飯や酒の購入を呼び掛けたことから「くらわんか茶碗」とも呼ばれました。三川内では主に藩窯以外の民窯で焼かれました。

一方、藩窯では献上品をはじめとする優れた品を作り続けました。藩窯の場所は特定されていませんが、三川内東窯、三川内西窯の可能性が高いと考えられています。

ヨーロッパを魅了した三川内デザイン 陶磁器意匠伝習所で匠の技を継承

王侯貴族に愛された薄手の技術

卵の殻のように薄く作られた製品はヨーロッパで「エッグシェル」(eggshell china) 卵殻磁器などと呼ばれ、極薄手のコーヒー碗などが高く評価されています。

この薄づくりの技術は江戸時代後期頃から三川内皿山で開発され、1837年に池田安次郎が完成させたといわれています。その作品は「純白の地肌で紙のように薄」と称されました。このコーヒー碗は身と蓋の合計がわずか30gほどであり、成形や焼成などに極めて高度な技術を有していたと考えられています。

長崎からヨーロッパに輸出され、王侯貴族などに愛されたエッグシェルは輸出の主力商品に成長し、その一部は有田の商人によって素地が買い付けられ、有田で上絵の文様を施して輸出されるものもありました。江戸時代後期から明治期にかけて、相当数がヨーロッパに輸出されていたと考えられており、その一部はイギリス・ロンドンの大英博物館などに収蔵されているものもあります。エッグシエルの商品は三川内焼を活気付ける大きな要因の一つになっていました。

一時、三川内地区での製作が途絶えて

卵の殻のように薄い卵殻手
ヨーロッパの人々を魅了した「エッグシェル」



1 美人絵コーヒークップ皿付 (明治、三川内焼美術館)
2 白磁皿付盃 (幕末、三川内焼美術館)

民窯の技術力が向上

幕末期(1853年頃)の三川内焼は、民窯において関西向けの酒器などが作られるようになりました。それまでの厚手のものと異なり、薄手で生地も精選され、染付もさらに精巧でした。

唐子絵の碗や皿は藩窯の後期に製造が始まりますが、民窯においても酒器等の高級品が作られるようになるなど、民窯の技術も大きく発展しました。

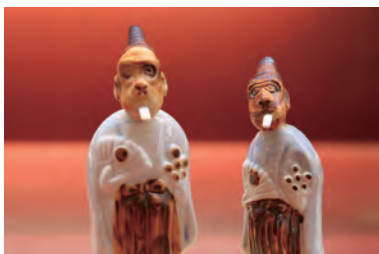
また、幕末期には「紅皿」と呼ばれた口紅用の容器が大量に焼かれました。坏(わい)の形状で、外周には一丈坂新町お笹(おささ)の商標が入っていました。大阪で最も繁栄した新町という遊郭街にあった店舗が注文したものとされています。

明治から今日の三川内焼

1871年、平戸藩が運営していた平戸焼物産会所は三川内山里長の古川運吉に一切の業務が譲渡されました。その後「満宝山商舗」と名を改め貿易を行っていました。二百年以上も藩窯であった三川内皿山が、民窯として長年の経営実績を持つ伊万里や有田と競争していくことは極めて難しく、その経営は大変厳しかったと伝えられています。

1874年、満宝山商舗の業務は豊島政治に譲渡されました。豊島は新たな販

「一子相伝」の匠の技
舌出し三番叟



舌を出した愛らしい猿の人形「舌出し三番叟」。この人形を江戸時代から作り続けている嘉久房窯にはこんなエピソードが伝えられています。

1664年、第四代平戸藩主・松浦鎮信は純白の磁器の焼成に成功した今村弥次兵衛の功績をたたえるため、名字帯刀を許し、「今村弥次兵衛如猿」の名前を与えました。色黒で猿に似ていた弥次兵衛はこの「猿の如し」の名前に心が収まらず、猿が三番叟(能・歌舞伎の演目の一つ)を舞い舌を出す人形を作り、藩主に献上しました。首が回り、舌を出し入れる面白さは、藩主や貿易のため滞在していたオランダ人などの間でも好評を博し、ついには大量に輸出されたと伝わっています。

1867年、幕府はフランスの要請でパリ万国博覧会に参加しましたが、その佐賀藩の出品物の中に舌出し三番叟人形がありました。その人形はナポレオン三世の皇后の目にも留まり、買い求められたそうです。人形の人気が高かったため、藩を超えて出品されたのではないかと考えられています。

愛嬌あるこの人形ですが、これを作るには、頭部や舌など全てを一体の状態で焼き上げるため、卓越した技術が必要で、大変難しいといわれています。この技術は当時から今まで一貫して「一子相伝」で受け継がれてきており、今もその秘密は明かされていません。

三川内の再興に尽くした
豊島 政治



1874年、古川運吉から満宝山商舗の業務を引き継いだ豊島政治。この時、彼は弱冠22歳だったといわれています。1885年には皿山代官所跡に商店を開店し、貿易も行いました。さらに韓国や中国へ陶磁器の視察に行き、技術の向上や消費者に合わせた意匠の改良を唱えるとき、内外の博覧会へ出品し、三川内焼の価値を高めました。また、1899年には「三川内陶磁器意匠伝習所」を開設し、藩窯時代の技術の継承に尽力し、自らも所長を務めました。このほか三川内郵便局を誘致して初代局長となるなど、三川内焼の再興や後継者育成だけでなく、公共のためにも尽くした人でした。

生まれは折尾瀬村(現三川内地区)桑木場。
写真提供: 嘉泉製陶所

路を開拓するなど、三川内焼の建て直しを図る一方で、三川内の有志と協力して「三川内陶磁器意匠伝習所」を設立しました。三川内皿山の技術の優れた陶工や東京美術学校(現東京芸術大学)の教授が指導に当たり、藩窯時代の優れた技術の継承と新時代の意匠創出に努めました。

また、今村豊寿は平戸藩時代の御用絵師の田中商文を呼んで、中国南画を陶画に取り入れるよう、絵画塾を開いており、伝統と並行して新しい意匠を取り入れる努力も行われました。

近年の三川内焼は、多様なニーズに応えるものとして、日用雑器から高級品まで多様化が進んでいますが、その礎にはこれまでの伝統がしっかりと受け継がれ、今の作品の中に息づいています。

三川内焼美術館

巨関、三之丞、弥次兵衛の親子三代の努力と研鑽によって、三川内で良質な磁器が焼かれるようになり、世界に誇る三川内焼の白磁の歴史が始まりました。三川内焼はその純白できめ細かい磁肌を誇る白磁、それによく映える呉須による繊細優美な染付、高温で焼成した珠のような輝きが特徴です。また、天草陶石の粘りの強い性質を生かし、透かし彫りやひねり物、細工物など、陶工の匠の技を生かした焼き物づくりで世界の人々に愛されてきました。これらの技術は今もしっかりと受け継がれており、さらに新しい意匠が加えられて、今日の三川内焼に反映されています。三川内焼美術館では御用窯時代の逸品から現代の秀作まで数多くの作品を展示しています。名品の数々を間近で堪能することができますので、どうぞご来館ください。

三川内本町 343 ☎ 30-8080
 開館時間 9時～17時(休館:年末年始)
 観覧料 無料(絵付け体験は有料)

透かし彫り

透かし彫りの技術は極めて高度で、その歩留まりも低いため、五重の塔や飾り香炉などの大物は優れた手技と時間を度外視した藩窯でなくては、とてもし得ない焼き物でした。1890年には透かし彫りの製品を皇室に献上したほか、明治天皇の佐世保鎮守府開庁式御臨幸の際には白鷄一対をお買い上げいただきました。



8	1			
10	9	4	3	2
11	7	5	6	

- 1 染付雲龍文花瓶 (明治・大正)
- 2 白磁龍彫大花瓶 (明治)
- 3 釉描彩唐獅子牡丹透彫瓶 (江戸後期)
- 4 染付鎮信公紋入置物 (大正)
- 5 傘形吊花入 (江戸後期)
- 6 染付菊秋草文徳利 (18世紀)
- 7 菊彫向付 (幕末)
- 8 染付三段重ね透彫紋入香炉 (大正)
- 9 唐子人形筆のせ (明治)
- 10 白磁竜彫水盃 (明治末)
- 11 染付波に千鳥文龍彫水指 (大正・昭和)

※三川内焼の歴史については諸説あり、今後も引き続き調査・研究を行っていきます。

特集に関する問い合わせ

社会教育課 ☎ 24-1111

